

華族の成人学習 —華族会館における活動に着目して—

伊藤真希

(愛知淑徳大学大学院 研究生)

【要旨】

華族の成人学習と華族会館のかかわりを明らかにすることを目的に、華族の学習の場として重要な華族会館がどのように活用されていたのか、新聞及び華族会館の資料等を調査した。その結果、華族会館が華族のために社交行事やクラブ活動や講演会などを開催し、学習の機会を華族社会に提供していたことが判明した。また華族会館は華族にとって使用が容易な集会場であり、華族の各種団体の活動にも利用された。華族会館は華族の学習とコミュニティの形成において重要な舞台であった。

1.はじめに

(1)研究の目的

本研究は、戦前のエリートであり、貴族院議員の選出母体として国の政治に関わった華族の生涯学習、とくに成人学習¹⁾について、華族会館がどのようにかかわったか、明らかにすることを目的とする。華族という特権階級が国家から求められた役割は皇室の藩屏であること、国民の模範であること、天皇・皇族と国民の間を繋げることなどがある。華族の子弟はこれらの役割を実現するために、軍人や外交官になることが求められた。そして家督を継ぎ、爵位を持つようになれば、貴族院議員になる特権が与えられた。華族の成人以前の教育には、まず家庭教育と、宮内省立学習院での学校教育がある。それ以降の成人の教育の場として重要になるのが華族会館である。華族会館は華族の各種団体が行う講演会や研究会の会場に利用されており、華族の生涯学習の機会に深く関わっていた。

本研究で着目する華族は学習院において中等教育の機会を保障され、さらに高等教育を修了した者も多く、学歴という点で今日的な学校教育の水準を享受していた。華族の成人の学習を明らかにすることは、日本の最も優れた階層の生涯学習の歴史と伝統の解明に繋がるものと考えられる。日本教育史の研究において注目されてこなかった、華族の教育についての研究を補うことも重要な課題である。

日本の生涯学習の歴史的研究には、社会教育の歴史から生涯学習を述べた宮坂広作『生涯学習の遺産—近代日本社会教育史論—』²⁾がある。しかし、上流階級である華族が自らの同族の社会のために行っていた学習活動には触れられていない。華族会館の研究としては久保正明「華族会館創設過程における華族集結の論理」³⁾などがあるが、華族会館についての研究は設立当初の政治史の分野に限定されており、華族会館での学習活動を中心においた研究はない。また、資料が乏しく明治後期や大正から昭和初期にかけての華族会館がどのような活動をしていたか明らかにした研究はない。華族会館の設立前夜から設立時と終戦後の組織の変更については、霞会館編・刊の『華族会館史』⁴⁾、華族会館と貴族院会派の形成については霞会館編・刊『貴族院と華族』⁵⁾などに詳しい。

(2)研究の方法

本研究では学校教育を離れた成人以降の学習が主題である。華族の組織した社団法人である華族会館東京本館を、華族がどのように利用していたか明らかにすることで、華族の成人学習が明らかになると考える。そのため華族会館がどのように使用されていたかを調査し、学習活動に関わる使用を抽出することにした。調査には読売新聞、東京朝日新聞、『華族会館誌』、『会館雑誌』、『華族会館報告』、『華族会館史』など⁶⁾を使用した。

2.華族会館の沿革とその使用状況

華族会館は明治7年(1874年)に華族によって設立された組織である。明治4年、華族に対して、西洋列国と肩を並べるためには、とくに華族は国民に注目されるころなので率先して勤勉努力しなければならないという勅諭が出された。それがきっかけとなり、華族の組織である華族会館が発足した。その設立過程は『華族会館史』に詳しい。明治8年11月に制定された「華族会館章程」の題言によれば、華族会館は国民の模範として国の発展のために華族が勤勉に努力するための施設として設立されている。そのため、華族会館は単なる集会場ではない。会館には会議堂が設けられ会議を用いて運営方法を決定し、さらに知識の習得のため書籍局、講義局、勉学局、翻訳局を開設し、華族およびその子どもに和漢洋⁷⁾の学問を授けようと計画した。その後、知識の拡充のために会館内に学務局と書籍局が開設された。明治10年には華族会館は華族の子どものための学校として学習院を設立し、会館の収集した書籍の多くは学習院に移された。

華族会館は設立時旧二本松邸を本館としたが、5度の移転後、明治23年に鹿鳴館を使用することとなった。そして昭和2年には三年町(現・霞が関)に移転する。華族会館は鹿鳴館時代の明治37年(1904年)に社団法人となった。この時初めて定款が作られた。定款による設立目的は華族の学習と親睦を深めることによって、国家に貢献することであった。

太平洋戦争終結後は、華族会館は一般社団法人霞会館と名前を変えたが、旧来と変わらず旧華族家の当主を主要な会員として活動を続けている。そして、現在も雅楽を行う竹絲会や和歌を行う陽向会、また講演会の開催などを通じて学習活動を提供している⁸⁾。

3.華族会館の使用状況

華族会館は明治7年の設立当初、会館の式典と運営会議での使用が多かった。また設立目的の華族の知識の発展と、会館への求心力の維持のために会館主催で横山由清による国史攬要、元田永孚による論語、尾崎三良による英国史という和漢洋の勉強会も行われた。

明治14年(1881年)10月に国会開設の詔が出されると、華族会館には議会開設に備える華族の団体の活動がおこなわれるようになった。金曜会、談話会、華族青年会、華族同方会などで、主な活動目的は国政についての知識や議論を深めることである。

明治15年には憲法や政治についての関心も高まり、会館主催で月に2回の法学者穂積陳重の政理学の講義が始まった。また明治16年には各国憲法講究会の集会が行われ、月に2回の勉強会を行うこととなったが、実際に勉強会が定期的に行われたかは不明である。

また明治22年(1889年)には憲法が公布され、公侯爵の法律研究会、伯爵会、子爵同志研精会、男爵会など爵位ごとに憲法研究を行う団体が作られ、勉強会が開かれている。そしてこれらの会は、憲法や政治についての勉強会というだけでなく、次第に貴族院議員の

選出団体という側面も持つようになっていった。華族会館でも貴族院の開設に向けて、国会についての「調査委員会」を立ち上げ、勉強会を開いたり、模擬国会を開催したりしている。さらに華族会館は、伯爵、子爵、男爵の議員選挙の会場であった。また貴族院議員には華族以外の勅選議員や多額納税議員もおり、彼らにも客員資格⁹⁾を与えるようになっていった。実際に国会が開設されると、華族会館は貴族院内会派の会合に使用された¹⁰⁾。

このように、華族会館は、華族の成人の学習活動の中心となっていた。華族が日本を西洋社会にならぬ近代化していくために知識を身につけ先導的な立場につくことが、ひとつ貴族の義務であったと受け止め、そのために勉強会などの学習活動が積極的に行われた事がわかる。憲法や海外の法律を参考とした法律など、社会の変化にも対応するために知識が必要であった。また貴族院議員という新しい職業に対する職業訓練の一環でもあった。

さて、華族会館では講演会や勉強会などの学習活動だけではなく、スポーツや芸術や伝統文化などの学習活動も行われている。

スポーツにかかわる学習として以下のことが行われた。明治12年(1879年)の夏頃から会館内で華族の馬術や射的(小銃)の技術向上が必要だと考えられた。明治13年に初めて射的乗馬大演習が吹上御所で行われた。これが華族会館の毎年春秋二季の乗馬と射的の奨励会の起源となっている。当然、奨励会は参加せず観戦することもできた。馬上打毬¹¹⁾が行われた乗馬奨励会には皇太子が臨場することが恒例であり、賞品も提供されていた¹²⁾。また華族会館が養勇館という武道館を借り受け、柔道などの練習を行ったこともあった。

さらに華族会館内には撞球室も設置されていた。鹿鳴館時代の撞球室は間取り図で食堂と比較しても広く、三年町時代の撞球室も講演室や食堂と同等の広さである¹³⁾。華族の社交とスポーツとして撞球を重要視していたことがわかる。華族会館の撞球部と交詢社などの団体との交流試合も行われた¹⁴⁾。また昭和2年に移転した三年町の華族会館にはテニスコートも設置された。

芸術や伝統文化に関わる学習活動として以下のことが行われている。最も早くに行われたのは、明治12年の懇親会の際に各家に伝わる珍品などの展示である。明治16年(1883年)には華族会館邸内の任有軒で、副館長東久世通禧らが温故知新のために作った温故会の古器古書画展覧会も開かれた。また懇親会などの余興に琵琶などの古典芸能の鑑賞も行われた。明治16年には元老院議員を中心に組織された講談を聞くための講談会も設立され、明治20年9月から明治22年12月に廃止されるまで月に1回の例会が行われた。

華族会館内ではクラブ活動も行っており、大正期には囲碁部や将棋部の活動や、謡曲部や運動部も活動を行っていた¹⁵⁾。また華族のうち絵画を趣味とする者たちの聊娛会の展覧会¹⁶⁾や、仕舞を趣味とする者たちは会館邸内の下賜の能楽堂で披露会も行われた¹⁷⁾。

このようにスポーツや芸術など趣味を通じての華族同士の親睦が図られていた。

そして社交活動として晩餐会なども開催されている。晩餐会には華族会館主催のものもあるが、貴族院主催や、日本と外国の交流団体である日英協会、日仏協会などの晩餐会にも使用された。晩餐会などの社交活動は、とくに貴族院議員を務める華族にとっては、職務上の情報の交換など密接にかかわるものであった。また結婚披露宴など家族の行事にも使用された。昭和になると華族会館により、華族の子どものためのイベント華族会館子供の日¹⁸⁾や、また家族で参加できる家庭懇親会¹⁹⁾も催されるようになった。

会館の使用頻度は大正期以降の集会数は年間約650～850件程度、集会人員数は年間約

15,000人程度だった。会館の集会室は、会員とその家族や家職、客員のみのものであり、使用料は必要なかったため、華族が気軽に集会室を利用できたことが推測できる。

4. 華族会館における学習会

華族会館では会館の設立当初には会館が主導して講義形式の学習会が開かれていた。先にも述べたが、華族会館が開館した明治7年(1874年)夏より横山由清、元田永孚、尾崎三良を講師とする和漢洋の勉強会が行われた。しかし、講義の運営には問題もあったようで、明治7年11月21日には講義の進捗について受講者からの不満があることが会議され、明治9年1月31日には松平乗承によって洋学が英語の文献のみを取り上げ他の西洋諸国について学べないことを問題視する意見書が出された²⁰⁾。これらの講義について明治9年の初頭までしか、開催が確定できる記述がみられなくなる。

その後、明治13年(1880年)には会館の主導で和漢洋学の講義が再び企画されている。このときには華族を会館に集めて、講義開催の説明会が開かれた。この際に副館長浅野長勲は、華族には皇室の輔翼と国民の標準となるためにも道徳が必要であり、同族の学問同好者と広く交際して学習することが知識と道徳の養成に大いに有益であると告げ²¹⁾、講義への参加を促している。受講者については皇学講義、漢学講義、洋学講義とそれぞれの講義に希望者を募っている。皇学講義と漢学講義には各60名ほどの参加希望者がおり、洋学は30名ほどであった。皇学は国学者本居豊穎の日本書紀、漢学は儒学者阪谷朗廬の孟子が月に2回開催された。洋学の開催は行われず、かわりに司法省の名村泰蔵によって刑法治罪法の講義が週に一度開催された²²⁾。そして明治13年8月には史記輪講を行う有志の会も組織されている。しかし明治14年には皇学講義の出席者が減りつつあり、3月1日に勉強会に積極的な者が欠席者に対して出席を促すための会を催している。

また明治15年からは法学者穂積陳重の政理学の講義が始まったが、明治16年には憲法会と呼ばれるようになっていた。しかし明治17年には皇典講義と歌書講義の会館による費用の支出が廃止されている。法学系の講義がその後も継続して行われたかは不明であるが、明治20年(1887年)5月には毎週木曜日に山吉盛光の「独乙国法論」が始まっている。

当初、国学や漢学の講義には参加希望者が多かった。しかし洋学と捉えられていた法律学の重要性が増し、法律の講義は明治20年以降も続けられたことがわかる。大正時代に入ると会館主催で例日を決めての継続的な学習会が行われた様子はない。東京において初めて行政的に成人教育が行われたのは、明治16年の就学奨励のための親に対する通俗教育であり、本格的に通俗教育が発展していく契機となったのは日露戦争以降だといわれる²³⁾。華族社会が一般社会よりも早期に組織的に成人教育に着手していたことがわかる。

5. 華族会館における講演会

華族の団体における講演会を見ていくことにより、華族がどのような事柄に興味関心を持ち、学習をしていたかを明らかにする。華族会館ではさまざまな団体が活動していた。その中でも、講話会のテーマが明らかになっている三つの団体について取り上げたい。

(1) 華族会館主催の講演会

華族会館主催の講演会活動には、明治12年(1879年)からの談話会の活動がある。これは華族のさまざまな分野の学識の発展のために演説の聴講と意見交換を月に1回行う予定

であった。初回は明治12年5月であったが、同年の10月には会の開催が停止されている。

また明治12年7月中に動物学者モースの講演会が3回行われており、それには皇族を招待し、学習院の生徒の聴講も許すなど、大々的な講演会であったことがうかがえる。しかし、それ以降、華族会館主催の講演会は見られなくなり、この後に触れる華族同方会が主催する講演会が行われるようになっていた。

大正に入ると、華族会館主催で同族講話会なる講演会が行われるようになった。実際にどのような講演が行われていたか、華族会館の年次報告『華族会館報告』から表1「華族会館報告に掲載された会館主催の講話会」を作成した。

表1 華族会館報告に掲載された会館主催の講話会

年月日	講師	テーマ	掲載号	国際理解に関連
1919.10.04	牧野伸顕	ベルサイユ会議に関する事	第35号	○
1919.11.01	ブリッチャード	特殊洋画法について。展览会も	第35号	○
1920.03.27	高楠順次郎	欧州近況視察談	第35号	○
1920.04.17	長瀬鳳輔	「大戦の齎せる世界地図の変更」	第35号	○
1921.09.24	山本信次郎	皇太子殿下渡欧供奉中の見聞談	第37号	○
1921.11.11	姉崎正治	「人心の動揺と国際関係」	第37号	○
1922.04.15	神田乃武	欧米帰朝談	第37号	○
1922.09.23	山内繁雄	「遺伝に就て」	第38号	
1922.11.25	井上哲次郎	欧米視察談	第38号	○
1923.04.21	高田忠周	「漢字の起源と三大文明」	第38号	○
1923.05.02	団琢磨	欧米美術の素人観 ※泰西美術品展览会	第38号	○
1923.05.02	藤原銀次郎	泰西の礼節と我茶道 ※泰西美術品展览会	第38号	○
1923.05.02	南條金雄	欧米絵画観 ※泰西美術品展览会	第38号	○
1924.03.28	稲田昌植	「農村問題に就て」	第39号	
1924.04.26	井出謙次	欧米視察談	第39号	○
1924.10.04	東郷安	「世界の無線電信に就て」	第40号	○
1924.10.04	毛利元良	「無線電話について」	第40号	
1924.11.15	武者小路公共	「欧米視察談」	第40号	○
1925.03.28	広沢金次郎	「西班牙の国情」	第40号	○
1925.04.25	松岡均平	「印度支那旅行談」	第40号	○
1928.05.28	荒木東一郎、松井龍吉	世界一周選手の講話。 ※選手を招待した午餐会	第43号	○
1928.06.26	船越光之丞	「支那近況に就て」	第43号	○
1930.05.14	土岐章	「英国産業運動の一端」 ※英国市場統制局に係る国産愛用ポスター展览会	第45号	○
1933.12.14	ハブラビ汗	「アフガニスタン国情に就いて」 通訳あり	第49号	○
1934.02.22	山田雲峰	強健法の講話と実演。通常総会後の同族懇親会	第49号	
1934.10.07	穴戸功男	「北部興安嶺突破談」	第50号	○
1934.10.07	三宅忠強	「熱河作戦ニ於ケル部隊行動」	第50号	○
1934.11.22	原道太	「海洋少年ト南海遠航ニ就テ」	第50号	○

(出典『華族会館報告』 ※華族会館報告第31号には1915年2月17日、1月23日、4月24日、6月14日、10月16日に講話会があったとされるが、詳細は不明である。そのためこの表からは省略した。

開催されたことがわかる28回の講話会の講演の内容は不明であるが、題名によれば国内問題をテーマとするのは稲田昌植の「農村問題に就て」のみである。一方でその他のテーマは国際関係、国際理解を主題とするものばかりである。とくに高楠順次郎の「欧州近況視察談」、神田乃武の「欧米帰朝談」など海外帰国者の視察談が8回にも上っており、華族会館が聴講者に講師の実体験から国際情勢を読み取ろうとさせる姿勢がうかがえる。

華族会館が設立される前、明治天皇は華族の子弟に対して、明治4年に「華族に海外留学周遊を奨励し給へる勅諭」を出している。そのため海外事情に深く知識を持つことは華族のひとつの大きな義務として捉えられてきた。また華族会館では海外誌の講読をしており、会員はロンドンタイムス等が図書室および新聞閲覧室²⁴⁾において閲覧できた。会館は設立当初、海外事情を知るために、海外の書籍の収集をしており、のちに収集書籍は学習院に移管されている。その後も華族会館は海外誌を収集しており、バックナンバーは会員

の希望者に対して払い下げを行っていた²⁵⁾。以上のような事柄から海外情勢を知るための講演会をよく企画していたものと推測できる。

(2) 華族同方会の演説会

明治 17 年(1884 年)には華族同志懇親会という交際を行う事で華族の結合を深める目的の会が組織された。華族同志懇親会は会員数を増やし、華族談話会、華族青年会、そして明治 22 年には華族同方会と名前を変え、運営されていく。谷干城が学習院院長であった明治 17～18 年の間は学習院を常会場としていたが、谷が院長を退いた後は華族会館を常会場に設定し、月に 2 回ほど講師や会員がスピーチする演説会が行われている。華族同方会は活動が盛んな時期には多くの華族が会員となっており、華族の 3 割から 7 割が加入していたとも言われ²⁶⁾、華族会館に次いで大きな華族の集団であった。

華族同方会の設立目的は、華族の本分を研究することであった。同方会会員は基本的に学齢以上の華族とされていた。華族の場合は「華族就学規則」で学齢は 22 歳までとされており、また華族以外でも特別に学識のあるものが加入する事ができた。華族同方会は成人の学習活動が主眼に置かれた組織だったのである。

さて、華族同方会でどのような講演が行われていたのか。演説会の演題と講師の一覧が表 2「華族同方会における演説会」である。その演説会は、同会の設立目的が華族の本分の研究であるため、演題が貴族に関連するものが非常に多い。「英国貴族之状態」、「仏国歴史上華族之地位」、「欧洲之貴族」、「東西貴族ノ比較及ヒ其教育論」²⁷⁾など、西洋の貴族制度について紹介し、それを日本の華族制度と比較する演説がある。また華族のあり方、とくに上院開設後の華族の役割を主題にした「貴族院ノ性質」、「憲法発布後華族ノ状態」、「貴族発達進化ノ天則」²⁸⁾などの演説もある。また「主権及上院ノ組織」「欧羅巴之貴族」「華族之方向」「国体ノ清華」²⁹⁾などの演説では、華族が特権階級として存在することは、皇室の藩屏と国民の模範という役割を果たすためであると、華族の存在意義について述べられていた。そして「貴女教育」、「東西貴族ノ比較及ヒ其教育論」「華族諸君ニ望ム」³⁰⁾は華族の子孫や女性への教育について論じ、国民の模範となる華族としての次世代を育てるためにも教育は非常に重要であると、それらの講演は締めくくられている。

ところで華族同方会での学習活動は専門家の講演と、会員自らの演説によって構成されており、会員に対して受動的な学習が提供されただけでなく、ときには自ら演説準備をする能動的な学習も求められた。会員は会報に論文を投稿する事もできた。そして、同方会の演説の内容からもわかるように、同方会では上院開設後の華族のあり方を模索していた。演説は議員としての重要な能力であることから、会員の上院開設へ向けての訓練の場だったと考えられる。また華族以外の演説者は、青木周蔵、稲垣満次郎、末松謙澄、添田寿一、田尻稻次郎など海外留学経験のある官僚が多くみられる。おそらく、同方会が海外からの最新の知識を得ようと彼らに講演を依頼したものと思われる。その後、明治 26 年(1893 年)6 月 24 日付の朝日新聞により華族同方会は解散の予定と報じられている。実際には休止状態に陥ったようである。明治 23 年に貴族院がおこり、貴族の本分についての勉強会ではなく、実際に政治会派内での諸活動が重要になっていったためであると考えられる。明治 30 年には華族同方会の再興を図ると報じられている³¹⁾が、とくに目立った活動はないようで廃会状態に陥っている。

表2 華族同方会における演説会

年月日	講師 内容	テーマ:華族	年月日	講師 内容	テーマ:華族
1887.10.08	演説会。添田寿一「英国貴族之状態」	○	1890.04.12	演説:北島道龍「国体ノ秩序及親一即今我邦ノ疾病」	
1888.02.25	演説:ボアソナート「仏国歴史上華族之地位」	○	1890.04.26	演説:小澤武雄「欧羅巴ノ貴族」	○
1888.03.10	演説:スタイン「欧洲之貴族」	○	1890.05.17	臨時会。演説:河井庫太郎「華族之方向」	○
1888.04.14	演説:田尻稻次郎「経済学大意」		1890.06.21	臨時会。演説:黒田綱彦「華族諸君ニ望ム」、萩原三圭「習慣亞性」	○
1888.05.12	講演、末松謙澄、新しい市町村制について(読売新聞1888.05.13付)		1890.06.28	演習会、金子堅太郎「貴族論」(朝日新聞、1890.07.01付)	○
1888.05.26	演説:青木周蔵「地方自治ニ関スル貴華族ノ権利及義務」	○	1890.09.27	演説:曾我祐準「軍備要論」	
1888.06.09	演説:青木周蔵「地方自治ニ関スル貴華族ノ権利及義務(前会ノ続)」	○	1890.10.11	例会。演説:曾我祐準「軍備要論(続)」、長岡護美「羅馬法概果」	
1889.06.23	演説:谷干城「欧洲華族之生活」	○	1890.10.18	例会。演説:曾我祐準「軍備要論(続)」	
1889.10.13	演説:鳥尾小弥太「儒教大意」		1890.12.13	例会。演説:内藤耻叟「国体ノ清華」	○
1888.12.08	演説、伊藤博文(主権論に関する演説)「主権及上院ノ組織」		1891.02.14	例会。演説:井上哲次郎「国家ノ性質及ヒ起源」、穂積八東「欧州予算法ノ沿革」	
1889.01.19	演説:西村茂樹「道徳談」		1891.03.14	例会。演説:萩原三圭「乳汁考」、添田寿一「歳計予算通論」	
1889.02.26	演説:伊藤博文「憲法ニ関スル演説」		1891.03.28	例会。演説:添田寿一「歳計予算通論(続)」。役員ノ協議会。	
1889.03.09	演説:佐野常民「貴族院ノ性質」	○	1891.05.02	例会、講演:稲垣万次郎「東西貴族ノ比較及ヒ其教育論」	○
1889.03.23	演説:勘解由小路資承「憲法発布後華族ノ状態」	○	1891.05.23	例会、講演:稲垣万次郎「東西貴族ノ比較及ヒ其教育論(続)」	○
1889.04.06	演説:加藤弘之「貴族發達進化ノ天則」	○	1891.06.13	例会。演説:大給恒「今流行祝詞ノ説」、谷干城「軍川鶴飼方及ヒ使用法一斑」	
1889.09.21	例会。演説:西村茂樹「貴女教育」。評議員会。	○	1891.06.27	町田実一ノ學術講演。稲垣万次郎「國際法上ニ於ケル日本国」、長岡護美「羅馬法概略」	
1889.10.12	講義、内容:谷干城「華族ノ資格」	○	1891.09.12	例会。演説:梅謙次郎「華族諸君ニ望ム」	○
1889.10.26	集会。報告:松平乗承ノ学習院学科程度調査ノ報告	○	1891.10.10	例会。添田寿一「經濟的軍備」、土方寧「英国裁判所構成法上ニ於ケル上院ノ位置」	○
1889.11.09	例会。小笠原長育が提出シタル華族會館ノ土地に関する議題ノ討論	○	1891.10.24	例会。演説:田辺朔郎「日本将来ノ道筋」、松平信正「北陸紀行鉄道ニ関スル意見」	
1889.11.13	例会。加納久宜ノ学習院についての報告	○	1892.01.16	例会。演説:近衛篤磨「國務大臣之責任」、内藤政共「製鉄」、新莊直陳「時事談」	
1889.12.14	例会。演説:日重野安禪「門地ノ事」、谷干城も演説		1892.02.27	会合、講演:北海道庁長官渡辺千秋「北海道之実況」	
1889.12.28	例会。幹事ノ改選。演説:大田原一清「華族ノ責任ノ重シ」	○	1892.03.12	例会。演説:佐野常樹「印度之概況」	
1890.01.11	講義、懇親会。演説:大給恒「武勇弁」、勘解由小路資承ら7名も演説		1892.03.26	例会。演説:大給恒「華族同方会諸君ニ告グ」	○
1890.01.25	例会。演説:加納久宜「所懐ヲ述テ同族ニ質ス」	○	1892.04.16	例会。演説:佐野常樹「印度之概況(続)」	
1890.02.08	例会。演説:西澤之助「特有論」		1892.07.02	例会。演説:西村茂樹「朋党論」	
1890.02.22	例会。大給恒ノ建議、東久世通禧ノ臨時建議		1892.09.24	例会。演説:阪谷芳郎「各国財政ト軍備及鉄道トノ關係」	
1890.03.08	例会。演説:萩原三圭[萩原三圭か、筆者注]「体育ノ要旨」		1892.10.08	例会。華族會館規則改正について協議	○
1890.03.22	例会。討論(大給恒ノ建議)		1893.04.08	例会。演説:稲垣万次郎「南洋航論」	

(出典)『華族同方会演説集』『華族同方会報告』『朝日新聞』『読売新聞』

※なお末松謙澄と金子堅太郎ノ講演は同方会演説集・報告には見当たらないが、朝日・読売には講演ノ内容が掲載されている。

(3)桜友会の講演会

桜友会は大正 10 年(1921 年)に発会した学習院の同窓会組織である。学習院は華族や皇族の子どものための学校であるが、華族以外の子どもも学ぶことができた。華族出身であっても華族から離籍した者もともに活動が行える団体であった。

設立目的は学習院卒業生の親睦と知識の交換のためであった。とくに発会準備段階では、木戸幸一は設立目的を大正期の思想界の動揺が激しく、各方面に改造運動が起こっているため、学習院の卒業生は一致団結して、社会問題を研究して、国家のために尽くすためだといっている³²⁾。木戸のように桜友会の発足に深く関わったものには、その後貴族院議員として活躍したものも多く、木戸と同じく岡部長景と有馬頼寧が大臣にまで上っている。

発会当初 700 人ものが会員が集まった。東京在住の会員から毎月 1 円、地方在住の会員から 50 銭の会費を徴収した。小学校教員の給料が月 12 円から 20 円であったので、比較的高い会費であった。また発会時には華族会館での集会は部屋の利用料が免除されていた。

桜友会は同窓会組織であるが、例会や総会の際には必ずといっていいほど講演会を開催している。講演会ではなく、活動写真や音楽鑑賞、座談会が行われることもあった。

桜友会発会から太平洋戦争末期までの講演会は 180 回以上に上る。講演の内容は国際情勢、政治、経済、科学、芸術、社会問題など雑多なものであった。また役人や警察官や消防吏員などの実際に防犯や防災など当時の生活の諸問題に対応している職業人に講演を依頼している。講演はつねに時事問題に関連して企画されていた。大正 10 年(1921 年)のシベリア出兵からの撤退の際には、ハルピン商品陳列所主任の森に「ロシヤの現状—特にウラジオストック方面に関する」講演をさせた。関東大震災を経た大正 14 年の帝国議会仮議事堂焼失後には警視庁消防指令小川秀好が「防火の要諦」、昭和 2 年(1927 年)のジュネーブ海軍軍縮会議の際には海軍中将原敢次郎が「軍縮に就いて」を講演した。昭和 7 年には玉の井バラバラ殺人事件と赤色ギャング事件が起こり、警察官浦川秀吉が「八ツ切事件とギャング事件」として講演した。昭和 7 年(1932 年)の満洲事変以降は戦争に関わる内容が増え、太平洋戦争開戦後は太平洋戦争の戦況や欧米の情勢についての講演が増加した。

桜友会が講演のテーマを会員の興味関心に関係なく時事問題を取り上げていたためか、講演会には聴講者が少なく、50 人以下の集会となることが多くあった。しかし真珠湾攻撃の 10 日後の昭和 16 年(1941 年)12 月 18 日に行われた大本営海軍報道課長平出英夫による「真珠湾攻撃」の講演のように、聴衆の関心が高ければ 100 名以上の参加もあった。時事問題を取り上げ続けたことには実社会の事象を学習しようとする姿勢があったことがうかがえる。また、実際に貧民の生活を見るために見学に出かけたり、大震災の際には貧民のための尋常夜学校に対する寄付をしたりと実際に社会と関わろうとする活動も行っていた。

6.おわりに——研究結果及び考察——

本研究により華族会館が華族の生涯学習とくに成人学習にどのような役割を果たしていたかを明らかにする事ができた。華族会館が発立当初、その設立目的の華族の知識の拡充のために、和漢洋学の連続講座を開設していたことが判明した。そして学習を通じた同一階級のコミュニティの形成もその視野に含まれていた。会館自体の提供する学術的な学習活動は、設立当初から徐々に減少していく傾向にあったが、定期的に講演会の開催は続いていた。また、会館が提供していた学習も、多岐にわたっていた。乗馬及び射撃奨励会な

どのスポーツや、囲碁部や将棋部あるいは謡曲部のような文化的なクラブ活動のなかで、嗜好を共有する者たちの学習と親睦を行っていた。また、広く華族同士の交際を深めるための社交行事も行っていた。華族会館は、ノンフォーマル学習とインフォーマル学習のどちらも含んだ多様な学習活動の機会を、華族社会に提供していたといえる。

また華族会館は華族という特権階級には使用が容易な集会場であり、華族が主体となっている各種の団体の会合に使用されてきた。華族会館において、頻繁に講演会をおこなった華族同方会も桜友会も政治的な意図が前面に出た組織ではなく、知識の充実と階級の親睦が主題であった。彼らの講演会による学習は、社会の変革によって、自ら学習を欲した事が大きな要因である。そして、華族同方会は華族令の制定や国会開設を通じて、華族という階級と、華族に期待される職業である貴族院議員のあり方についての学習を行っていた。また桜友会は、貴族院内会派が各爵位に分かれており、華族全体としてのコミュニケーション不足が意識され、そして大正期の社会の変動に際して、華族の団結と一般社会との関わり方についての模索のための学習だと考えられる。

このように華族という階級が社会の変化に適応するための学習活動は、華族会館の学習会場の提供に支えられていた。国会開設以降は華族会館が法人として華族の学習支援を企画・運営することは減少していった。しかし、華族会館は華族の学習、そして華族に限定されてはいるがコミュニティの形成において重要な舞台であった。

華族は学習院により中等教育の機会を特権的に保障されており、とくに学歴という点において今日的な学校教育の水準を享受した。また華族は高等教育の機会も享受していた。いわば華族は最も早くに今日的な豊かさを有していた社会階層といえる。そして、華族は高等教育修了後、生涯にわたる学習活動を華族会館において行なっていた。このことは生涯学習の歴史的な流れから見ても、日本における高等教育修了者の集団の生涯学習の先駆けであったといえる。華族の華族会館における成人の学習活動は地域的、社会階層的に限定された活動であったが、今日までの日本の生涯学習の歴史にとって、国民全体の学習活動にもかかわる一つの動きであったととらえることは重要である。

注記・引用文献

- 1) 本論文で使用する「成人学習」は、学齢及び就学段階を終了した成人の学習を指す。
- 2) 宮坂広作『生涯学習の遺産—近代日本社会教育史論—』明石書店、2004年
- 3) 久保正明「華族会館創設過程における華族結集の論理」近現代史研究会『年報近現代史研究』3、1—17頁、2011年
- 4) 霞会館編『華族会館史』霞会館、1966年
- 5) 霞会館編『貴族院と華族』霞会館、1988年
- 6) 使用した参考資料は以下のものである。霞会館華族資料調査委員会編『華族会館誌』上下巻、吉川弘文館、1986年。霞会館華族資料調査委員会編『会館雑誌』霞会館、1995年。華族会館『華族会館報告』(学習院大学に第38号、そして国会図書館に第31号、第33号、第35号、第37号、第39号、第40号、第43号、第45号、第49号、第50号がある。1916年から1935年まで、一部欠落があり11冊のみではあるが、資料に使用することができた)。桜友会『桜友会会報』(学習院大学所有の第1—63,65—67号、1921—1943年)。華族同方会『華族同方会演説集』1—6号、1888—1889年(国会図書館デジタルコレクション)。同方会事務所『華族同方会報告』1—41号、1889—1893年(国会図書館デジタルコレクション)。前掲『華族会館史』。霞会館『華族会館の百年』霞会館、1975年。桜友会史

編纂委員会編『桜友会史』学習院同窓会桜友会、1990年

- 7) 和漢洋と書いたが、『華族会館誌』には国学の講義は皇学講義や皇典講義と記載される。
- 8) 霞会館華族資料調査委員会『会館百四十年の歩み』霞会館、2014年、123-129頁
- 9) 客員は華族以外の貴族院議員で華族会館を使用できる者である。会員とは異なり、客員は家族や友人を招待できないなど、華族会館の使用についての制限があった。
- 10) 昭和初期までにそれぞれの貴族院会派は自前の事務所を所有するようになっていった。
- 11) 騎馬打毬ともいう。起源はポロと同じくする。江戸時代には将軍家や各大名家によって奨励されたエリート武士の嗜みであった。この競技には相当な乗馬技術が必要である。
- 12) 前掲『華族会館報告』第31号、1916年、11頁
- 13) 前掲『華族会館の百年』79、129頁
- 14) 読売新聞 1926年9月26日朝刊
- 15) 前掲『華族会館報告』第43号、1928年、30頁
- 16) 聊娯会は大正8年に発足の華族の美術会である。中心人物は南部利淳伯爵で、黒田清輝も展覧会に尽力している。黒田清輝『黒田清輝日記』第4巻、中央公論美術出版、2004年、大正8年10月13日条(1295頁)。
- 17) 前掲『華族会館報告』第45号、1930年、5-9頁。能楽堂は、華族会館が鹿鳴館から三年町へ移転した際に移築させている。
- 18) 前掲『華族会館報告』第43号、1928年、8頁。子どもの日の活動は主に映画観賞であった。第43号にのみ活動実績が上げられており、継続した行事かは不明である。
- 19) 前掲『華族会館報告』第45号、1930年、28-29頁。家庭懇親会は会館庭園で行われ、模擬店のおでん屋台や余興の奇術があった。第3回まで開催されたことがわかる。
- 20) 前掲『華族会館誌』上巻、75、76、130頁
- 21) 前掲『華族会館誌』上巻、291頁
- 22) 漢学講師は当初元田永孚であったが、すぐに阪谷に代わる。阪谷も就任翌年に亡くなった。また講義は夏期には行われなかった。講師への謝金は講義一回につき5円であった。
- 23) 松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版、2004年、116、127-128頁
- 24) 前掲『華族会館の百年』141、142、143頁
- 25) 前掲『華族会館報告』第31号、1916年、1-2頁
- 26) 東京朝日新聞 1893年6月24日朝刊、1897年4月15日朝刊
- 27) 添田寿一「英国貴族之状態」『華族同方会演説集』1号、1-33頁、1888年。ポアソナート「仏国歴史上華族之地位」同上、35-69頁。スタイン「欧洲之貴族」『華族同方会演説集』2号、1-47頁、1888年。稲垣満次郎「東西貴族ノ比較及ヒ其教育論」『華族同方会報告』24号1-14頁、25号11-20頁、27号12-19頁、1891年
- 28) 佐野常民「貴族院ノ性質」『華族同方会演説集』6号、1-10頁、1889年。勘解由小路資承「憲法発布後華族ノ状態」同上、11-20頁。加藤弘之「貴族発達進化ノ天則」同上、21-34頁
- 29) 伊藤博文「主権及上院ノ組織」『華族同方会演説集』4号、1-28頁、1889年。小沢武雄「欧洲之貴族」『華族同方会報告』8号27-31頁、9号2-8頁、1890年(演説時「欧羅巴之貴族」)。河井庫太郎「華族之方向」『華族会館報告』12号、18-27頁、1890年。内藤耻叟「国体ノ清華」『華族同方報告』17号、2-15頁、1891年
- 30) 西村茂樹「貴女ノ教育」『華族同方会報告』1号、15-26頁、1889年(演説時「貴女教育」)。前掲、稲垣満次郎。梅謙次郎「華族諸君ニ望ム」『華族同方会報告』28号、16-21頁、1891年
- 31) 朝日新聞 1897年4月15日朝刊
- 32) 読売新聞 1920年11月30日朝刊